

言 頭 卷



大 條 虎 介 先 生 の 事

気仙医師会 会長

滝 田 有

昔の気仙で活躍した医師大條虎介（おおえだ こすけ）先生をご存知だろうか？

先生は明治2（西暦1869）年2月に仙台藩士佐藤文弥の三男として生まれ、同5月一家をあげて気仙郡今泉に移住、医師大條快順の養子となり改姓、明治23（1890）年旧制第二高等中学校医学部（現・東北大医学部）卒、養父快順の下で修練し独立、世田米で開業した。貧しい者から診察代を取らず、その分金持ちには多額を請求した、「赤ひげ」を地で行く医者だった。

しかし、彼の真骨頂は別の処にある。それは理不尽な社会に対する憤り、弱者に注ぐ愛情、この熱情の塊が医者や気仙という枠組みに収まりきれず、「爆発」を生涯何度も繰り返した。

最も激しいものは、かの幸徳秋水の大逆事件（明治43年）に連座したことである。世田米の自宅は家宅捜索を受け、刑は免れたものの、「特別要視察人甲号」に認定、常時警官2名の尾行と年6回の取り調べを数年受け続けた。思想的背景を詮索するよりも、竹細工の会等を通じ近郷の貧しい人々と育んだ情愛、山間の村に残る名子制度のような旧習への反抗心が幸徳秋水の熱情に共鳴したのだろう。晩年は、下有住の鉍毒事件の収拾にも力を尽した。被害を蒙った気仙川下流の長部の漁民の暴発を抑えつつ、自ら県知事や鉍山会社との折衝に当たったのである。その他、冒険家郡司大尉（幸田露伴の実兄）との熱き友情やその北千島探検への多額の寄付。さらには神道家川面凡児に触発されたミソギの普及など医業以外の行動は枚挙に暇がない。

大正10（1921）年に亡くなったので、あと数年で没後100年である。近年高齢化社会の到来を見据えて「地域包括ケア」や「医療介護連携」が国策となり、医者も本業だけに専念していればよい時代ではなくなった。今の世ならば虎介先生の熱情も近年急拡大した医者の仕事の枠内に収まってくれたのではないかと思う。